

新発売! タッチフリーミニ

手を触れずに捨てることができて大容量!
女性用トイレの必需品「タッチフリーサニタリーボックス」に
ミニサイズのタッチフリーミニが登場!

汚物入れ「あればいい」になつていませんか?

手をがざせば自動オープン!

小さすぎる!
中身が見える!

タッチフリーミニ (新発売)

医療の進歩や排泄補助用品の進化によってリハビリパンツや尿漏れパッドの普及が進んでいます。トイレの汚物入れは性別問わず必要とされています。

トイレ診断士

芸人

第22回

佐藤満春のトイレな話 シーズン2

I LOVE TOILET! I LOVE TOILET! I LOVE TOILET!

本を出版しました

佐藤満春です。ここを読んでいる方にとつては非常にどうでもいい話なのかもしれないのですが、私の本が出版されることになりました。「スターにはなれませんでしたが」という自叙伝的なエッセイ集です。お笑い芸人やラジオパーソナリティを目指して芸能界に足を踏み入れたものの、各所で挫折を繰り返し、「向いてること」に自然に流れ着いた結果、普段あまりスポットライトを浴びることはない放送作家という仕事をメインに、様々な顔を持ちながら仕事をしています。私がどのような経緯で現在の仕事にたどりついたのか?どう頭を巡らせたのか?などあけすけに240ページほど書かせていただきました。

トイレに関するお仕事もそういった意味では「日陰」であることも多々あると思います。長らく「トイレ掃除」は「罰ゲーム」の代表例

として考られてきたことから「汚いトイレを掃除するなんてみんな嫌だよな」という偏見にまみれた何かが染みついてしまっている気がしています。トイレは生活には欠かせません。人間の尊厳にも関わる場所。そこを掃除すること、そこを綺麗にすること、環境を整えるという仕事は「人間を整える仕事」だと僕は思っています。長いことお世話になっているアメニティの山戸社長のお人柄は菩薩業そのもので「人のため」「人間のため」そして「自分のためにも」トイレを磨き続けているように思います。僕もそうです。もう生きる理由に自我はありません。家族や環境、文化、誰かの何かのための生きるしかありません。それは決して華やかな世界で

はないかもしれません。でも、いいんです。生きる理由は実はとてもとても身近に転がっているかもしれません。
何が言いたいかというと、佐藤満春著「スターにはなれませんでしたが」是非買ってくださいという告知です。笑。

トイレ歳時記 3月

3月1日は防災用品点検の日
関東大震災の起こった9月1日の他、季節の変わり目となる3月1日、6月1日、12月1日が防災用品点検の日と定められています。非常用の飲料・食料は消費期限が切れていませんか?もちろん、家族分の携帯・簡易トイレの枚数が足りているかも確認してくださいね。

編集後記

災害時には避難所となる近所の小学校で「避難所設営訓練」なるものがありました。訓練では災害用倉庫の中に何が入っているのかを確認したり、マンホールトイレを実際に設営したりしました。写真や動画を見たり話に聞いたりするだけでなく、実際に触ってみたり体験することによって、いざ災害が起こった時には慌てず対応できるという安心感につながったのではないかと、訓練の大切さを感じました。(セルベッヂオ中嶋)

あなたの町のアメニティネットワーク

アメニティ本部フリーダイヤル ☎0120-57-1110

トイレを楽しくする新聞 かわや版 KAWAYABAN

2023 春号 Vol.101

特集 南米の真ん中にバイオトイレ建ててみた

認定NPO法人ミタイ・ミタクニヤイ子ども基金(以下、ミタイ基金)と横浜国立大学の学生が中心となりクラウドファンディングで資金を調達し、南米パラグアイ共和国にバイオトイレが建設されました。今回はこのプロジェクトに参加した横浜国立大学4年の江藤克さんにレポートを届けていただきました。

横浜国立大学・カアグラス大学・ミタイ基金の仲間たち

こんにちは。ミタイ基金インターの江藤克と申します。今回パラグアイにバイオトイレを建設したプロジェクトについてお伝えしたいと思います。



パラグアイってどんな所?

日本から約36時間、飛行機を3回乗り継いでやっとたどり着く事ができるパラグアイ。さらにバスで3時間の地方都市、その農村部が今回のプロジェクト対象地です。パラグアイの人はとてもフレンドリーで、一回知り合えば家族のように接してくれる国民性



です。ゆっくりとした時間が流れ、日本では失われてしまった心の豊かさがあるようでした。パラグアイの都市部のトイレはペーパーの流せない水洗トイレで、紙を捨てるゴミ箱が便器の脇にあります。ペーパーはほとんど設置されていないので持参しなくてはなりません。農村部に行くと、トイレはいわゆる「ぼっくん便所」である割合が増えていきます。

農村の直面する問題

農村部では水不足が深刻で、農家は壊滅的な打撃を受けています。また、無計画に穴掘り式のトイレを設置することから、土壤や小川、井戸水の汚染が起きています。水を使わず排泄物を適切に処理することができるバイオトイレを用いて、今ある水資源を守りながら、さらに彼らの生計向上を目指したいと考えました。このバイオトイレは、糞尿を分離し、尿は水で薄めて畑に散布できる液肥にし、便はおがくず等の有機物と混ぜ、発酵・分解させて肥料として利用します。



認定NPO法人
ミタイ・ミタクニヤイ子ども基金
「みんなに優しい世界をつくる」を
ビジョンに青少年の健全な成
育、男女の社会参加、経済的自
立支援事業などを国内外にて展
開。パラグアイでは農村における
学校建設や教育支援、生活改
善支援など行っている。1995年
設立。「ミタイ」は現地先住民族
の言葉で「こども/こどもたち」を
意味する。
<https://mitai-mitakunai.com/>

堆肥を使って農作物を栽培し付加価値をつけて販売するこ
とで、将来的には生計向上に
つながる好循環が生まれるこ
とを目指しています。



バイオトイレ使用のメリット

- 排泄物による感染拡大リスクの抑制
- トイレでの水使用削減で飲用水確保
- プライバシーの確保で性犯罪抑止
- 堆肥の利用で菜園の収穫量増加
- 化学肥料購入費用の削減

本プロジェクトは、ミタイ基金の藤掛洋子理事長(横浜国立大学教授)のご指導のもと、通訳として高橋なるみさん、大橋玲史さん、現地サポーターとしてテオフィロ・ブルゴスさん他、多くの関係者の方々にご協力いただきました。

いざ！パラグアイへ！

クラウドファンディングには最終的に71名の方から目標額を超える63万6千円もの支援をいただくことができ、バイオトイレ2基を設置する運びとなりました。そして2022年夏、「パラグアイ

1.生活排水による水質汚染

トイレは地下にし尿を浸透させるいわゆるぼっくん式か、水洗トイレの排水を大きな穴(浸透枠)に流し込む方式です。その他生活排水は庭のくぼみに流していますが、これらが水質汚染の原因となっています。



農村家庭の庭にあるぼっくん便所



庭のくぼみには生活排水が溜まっている

2.気候変動による干ばつ

生活用水はおそらく消毒された井戸水で、小さなコミュニティごとに給水タンクから配水されていますが、よく水が出なくなったり、井戸水の量が足りなくなったりするようです。(私も実際にトイレ使用後に水が出ない経験をしました…。)



村で利用されている給水タンク

3.建築の様子

協力してくれる業者の方と何度も打ち合わせを重ね、現場の状況に合わせて建築しやすいように、使いやすいように設計図を変更したりしながら作業を進めました。現地では建築物には色を塗るのが一般的なそうで、協力者の方の発案で、エコ=緑のイメージから外装は緑色になりました。



建築中の様子



大学の農場に設置

農家の家庭に設置

バイオトイレの室内

そして各方面、多くの方の協力のおかげでついにバイオトイレ2基が完成しました。1基は実際の利用を想定して農村の家庭に、もう1基は土壤改良剤の効果を検証するためにミタイ基金と横浜国立大学が連携協定を結んでいるカアグラス国立大学の農場内に設置されました。

4.未来に向けて

パラグアイの水不足の原因のひとつには気候変動の問題があります。そのネガティブな影響をまっさきに受けるのがパラグアイの農家さんたちをはじめとする途上国の人たちです。このプロジェクトを通して将来の世代のために少しでも貢献できればと思います。また、バイオトイレが持続可能なインフラのひとつの選択肢となることを願っています。

編集部より

日本でも昔は糞尿を堆肥にして畑で利用するという自然の循環システムが成り立っていました。そういった考え方、日本の技術や学生さんたちの情熱をもって、地球の裏側のパラグアイでバイオトイレの建設が実現したことは感慨深いものがあります。バイオトイレをきっかけに現地の方の暮らしに様々な良い変化をもたらすのではないかと思います。(写真は全て横浜国立大学都市科学部藤掛洋子研究室提供)



株式会社総合サービス

門坂淳一

株式会社総合サービス

災害時や医療・介護、アウトドアで使用する携帯トイレ・簡易トイレなどを手掛ける。日本トイレ協会から刊行された進化するトイレシリーズ「災害とトイレ」の執筆も担当。災害用トイレの普及啓発活動も行っている。



かわや版100号を記念して、トイレの各分野でご活躍されている専門家の方それぞれが描く「トイレの未来予想図」を連載でお届けしています。連載第2回目の今回は、株式会社総合サービスの門坂淳一さんに、災害時のトイレ対策についてお話を伺いました。

災害時、避難所のトイレは…

国や自治体の支援の方向性について

過去の災害時における教訓から、国や自治体は「いつ誰がトイレに行きたくなても、安心して使える」よう整備することが必要です。特に屋外では男女に分けるなど環境を整えることにより、トイレを我慢することによっておこるエコノミークラスマ症候群などの健康被害を防げます。屋内のトイレや仮設トイレは和式便器から洋式便器にすることで、高齢者が身体への負担を軽減することができ、現在、国や自治体では、特に洋式便器の災害用トイレの整備に取り組んでいます。

今後は徐々にですが洋式の災害用トイレが増えていくことになるでしょう。

これまでの災害では、被災した都道府県から国へ支援要請が入った後、必要な物資を届けていました(ブル型支援)。しかし物資の手配や輸送に時間がかかるため、2016年に発生した熊本地震では、都道府県からの要請を待たずに必要不可欠と思われる物資を国が調達して早期に輸送する「ブッシュ型支援」が初めて発動されました。

熊本地震の際にはブッシュ型支援で送られた支援物資が、各地の避難所までうまく行き渡らないという問題も浮き彫りになりました。

今後はそうした課題の解決をしていかなければなりません。

家庭における災害用トイレの備蓄率は、全体の19.5%に留まります(一般社団法人日本トイレ協会調べ)。近年では、災害時に自宅に留まる「在宅避難」も増えており、各家庭での備蓄は必須と言えます。いかに公助に頼らず、自助の視点から準備することが喫緊の課題です。企業については、新型コロナウィルスの蔓延により、在宅勤務も増えており、企業は会社内だけでなく、各個人に対する対策も必要です。

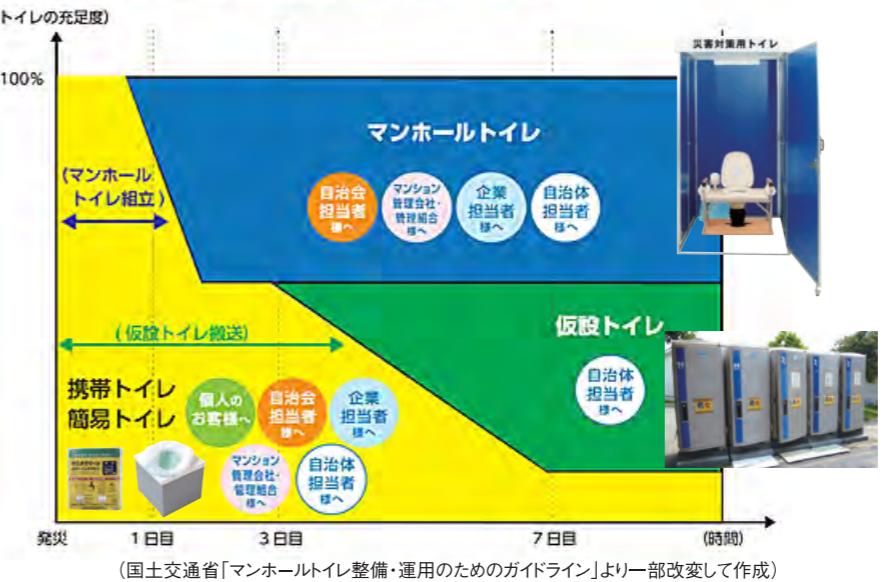
また、備蓄品管理もアナログからデジタル化へ進んでいます。専用システムなどで備蓄数量や期限も一元管理でき、今後も広がっていくと予測できます。

災害時のトイレの目標や理想の姿

災害時における携帯・簡易トイレの利用回数または枚数の目安として、一人1日5回(枚)とされています。災害発生から3日間は自助や共助で携帯トイレや簡易トイレで対応することが重要です。3日目以降に支援物資が届き始めるので、最低3日、推奨1週間分の備蓄を予め行っておくことが大切です。

左の図は、国土交通省が発表している災害時のトイレ確保の基本的な考え方です。これを見ればわかるように、発災3日目までは携帯トイレやマンホールトイレを使用するようになっています。災害時に災害用トイレをすぐ使用することができるよう、自治体やマンションの管理組合などで予め役割を決めておく必要があります。

災害時のトイレの確保の基本的考え方



携帯トイレのこれからの形

これからは、地震や風水害に加えて、「感染症」の流行が重なる「複合災害」への対応が求められます。また、二酸化炭素の排出量に配慮した商品や、災害用以外の用途も持たせて普及を促進する、といったことが新しい商品開発のテーマになってきています。

今後さらに皆様の手に取りやすい形の商品開発や、普及啓発活動を業界をあげて取り組んでいきます。

感染症対策

抗ウイルス成分が入っており、感染症の発生リスクを抑える効果が期待できる。

ECO商品

植物由来の「サトウキビ」から作った「バイオマス」を30%配合している。



介護向け商品

介護や山登り、キャンプなどの日常生活で使える。ローリングストックし、災害が発生した際にも活用しやすくなる。

